

西村 重夫

はじめに

ここ連日、世界の目が湾岸戦争に集中し、それにともなってイスラームという言葉がマスコミでしきりに使われるようになっていきます。私たち日本人にとって遠い存在だったイスラームが身近な存在になったといっても、湾岸戦争が契機であるとするれば、余り喜ばしいことではありません。もともとイスラームはサウディアラビアやイラン、イラク、クウェートといった中東アラブ世界と結びつけてイメージされることが一般的でしたが、湾岸戦争の報道によって、イスラーム・イコール・中東あるいはアラブ世界という図式は、さらに定着したように思われます。

ところで、イスラームを信仰する人が世界で一番多い国はどこかというところ、その答は、今から私がお話しするインドネシアという国です。インドネシアの人口は、中国、インド、ソ連、アメリカに次いで第5位。およそ1億8000万人といわれています。そのうち88%がイスラーム教徒といわれていますから、単純に計算しますと、1億6000万人がイスラームを信仰していることになります。もちろん、この計算には、赤ちゃんや幼児も含まれますから、現実的な数字とは言えません。しかし、それにしても、これほど多くのイスラーム教徒を抱える国がほかにないことは事実です。ちなみに、今日騒がれているイラクの人口が1700万人、クウェートの人口が200万人、サウディアラビアの人口が1400万人ですから、インドネシアの大きさが容易に理解されます。

このようにインドネシアが世界最大のイスラーム教徒を抱える国であるとしてみると、インドネシアがイスラームを国教としていとお考えになるかもしれませんが。しかしながら、1945年に独立を宣言したインドネシアは、イスラ

ームを国教とする道を選ばず、信教の自由を憲法でうたい、パンチャシラを唯一の原理とする国を築こうとしました。パンチャシラとは、初めて耳にされる方が多いかもしれませんが、インドネシア共和国の建国五原則をさします。パンチャが数字の5を、シラが原理あるいは原則を意味しますから、パンチャシラとは、五原則の意味なのです。この五原則を順番にあげてみますと、第1が唯一神の信仰、神を信仰することです。第2はというと人道主義で、第3がインドネシアの統一です。この第3の原則は、民族主義と置き換えてもよいものです。続く第4が民主主義であり、最後の第5が社会正義です。パンチャシラの原則を正確に言いますと、もう少し長くなり、それぞれに説明を必要とするのですが、ここでは、とりあえず省略した形で示しておきます。

このようにインドネシアはイスラーム教国の道を選びはしませんでした、だからといって世俗的な国家を選択したわけではありません。今申し上げたパンチャシラの第1原則にありますように、唯一神の信仰が何よりも重視されています。イスラーム国家ではありませんが、宗教を尊重することが国是としてあげられている国なのです。

〈イスラーム教育の制度的背景〉

さて、このシンポジウムで私はトップバッターですから、東南アジアのイスラーム世界を分かりやすい形で描写することが期待されています。ところが、私にはとてもそのような大役を果たす力量がありません。ここでは、インドネシアの公立小学校で使われているイスラーム教育の教科書を題材にして、イスラーム世界の一端をご紹介しますと思います。

教科書の内容に入る前に、国民教育におけるイスラーム教育の位置づけについて二点ほどお話ししておいた方が良くと思います。

第1の点は、インドネシアがイスラームを国教とせず、国民に信教の自由が保障されているという先ほどの話とかかわることです。インドネシアの学校制度は、日本と同様、6-3-3制です。小学校6年、中学校3年、高校3年、そのうえに大学があるのですが、小学校から大学に至るまで宗教教育が必修の

教科となっています。インドネシアの場合、憲法によって信教の自由が保障されていますから、宗教教育の時間には、イスラーム教育のほか、カトリック教育、プロテスタント教育、ヒンドゥー教教育、仏教教育のそれぞれが児童生徒の信仰に応じて提供されます。ちなみに、お隣のマレーシアでは、イスラームが国教となっていますから、宗教教育といえば、すなわちイスラーム教育です。イスラーム教徒の生徒は宗教教育、つまりイスラーム教育を受けますが、その時間、イスラーム教徒でない生徒は道徳の授業を受けるようになっています。隣り合った国ではありますが、インドネシアとマレーシアでは、宗教教育の方針が異なっているのです。

第2の点ですが、私をご紹介しようとする教科書は、文部省管轄にある小学校で使われているものです。ところが、インドネシアの場合、イスラームの教育は、文部省管轄下の学校で実施されているだけでなく、むしろ宗教省の管轄下にある学校でさらに比重を大きくして行われています。文部省所管の学校がスコラと呼ばれているのに対して、宗教省所管のイスラーム学校は、マドラサと呼ばれます。マドラサはアラビア語を語源とし、まさに学校という意味です。このスコラとマドラサは、ともに学年、学級制をとり、宗教教育のほかにインドネシア語や数学、理科、社会といった世俗的な教科が教えられています。これとは別に、いわゆる学校というカテゴリーには入りませんが、ポンドック・プサントレンという教育組織があります。インドネシアの農村部を中心に広く普及している寄宿舎制の教育機関ですが、このポンドック・プサントレンの中にインドネシアのイスラーム教育の伝統を見出すことができると考えられます。実は、このポンドック・プサントレンについては、次にコメンテーターをされる西野さんが本格的に調査されており、昨年『インドネシアのイスラーム教育』という素晴らしい研究書を発表されています。ポンドック・プサントレンの世界への案内役としては、西野さんの右に出る人はいませんので、後ほどお話をうかがうことができるのではないかと考えています。

第1領域：六信

前置きが長くなりましたが、それでは、イスラーム教育の教科書の世界に入ることにします。小学校1年用の教科書を持ってきました。6歳か7歳で小学校に入学した新入生が、まず出会うのがこのページです。黒い縁なし帽をかぶった男の先生が教室の前に立ち、何かを教えている姿が描かれています。ざっと中味を読んでみましょう。

アフマド先生は、私たち1年生のクラスの先生です。

先生は、イスラーム教育を教えてください。

私たちは、先生のお話を聞くのが好きです。

先生は、イーマーンについて教えてください。

信仰の内容は、六つあります。

第一は、アッラーに対する信仰です。

第二は、アッラーの天使に対する信仰です。

第三は、アッラーの啓典に対する信仰です。

第四は、アッラーの使徒に対する信仰です。

第五は、来世に対する信仰です。

第六は、天命に対する信仰です。

この会場には、イスラームの専門家の方もいらっしゃって、釈迦に説法ならぬマホメットにコーランになってしまいましたが、若干の説明を加えます。イーマーンとは、日本語で六信と一般に訳されます。イスラーム信仰の内的、精神的側面をさして、それが教科書に書いてありましたように六つあるわけです。第一にあげられているのがアッラー。イスラームの唯一神であるアッラーに対する信仰です。第二の天使は、アッラーと人間の間存在的存在ですが、その天使に対する信仰です。第三の啓典ですが、イスラームの場合、コーラン（クルアーン）を直ちに思い浮べるわけですが、それだけでなく、モーゼに下された律法の書、ダビデに下された詩編、イエスに下された福音書も含まれます。

教科書で中心的に取り上げられているのは、預言者マホメット（ムハンマド）に下されたコーラン（クルアーン）です。アッラーの啓示である啓典に対する信仰が第三です。第四の使徒とは、アッラーの使命を受けた使いです。これもイスラームの場合、マホメット（ムハンマド）が即座にあげられますが、そのほか、ノア、アブラハム、モーゼ、イエスも使徒として数えられます。ただ、教科書では、一連の使徒の中でムハンマドが最後の使徒であるとして特に強調されます。第五は、来世に対する信仰です。教科書にもあとのほうで描かれているのですが、終末の日が訪れると、人間は、すべて死ぬ前と同じ姿に戻されます。これを復活と呼びますが、そうすると人間は、アッラーの前で審判を受け、生前になした信仰や行いによって、天国に召されるか、地獄に落とされるかが決定します。この来世を信仰するのが第五で、第六は、天命への信仰です。これも教科書から引用しますが、アッラーは全智全能であり、人間のあらゆる行為も神が創造したものであるという考え方です。人間の運命は、アッラーのみが知るというわけです。

以上がイマーン、六信で、イスラームの最も重要な部分です。それが小学校1年用教科書の1ページ目に書かれているということがおもしろい点です。小学校1年用教科書で六信に直接関係する部分は、ほかにもあります。「アッラーへの信仰」という章がそれです。少し冒頭の部分を読みます。

太陽、天、地、すべての自然。

それらはすべて、唯一神アッラーが創造されたものです。

創造主は、創造されたものとは同じではありません。

アッラーは、創造主です。

そして、創造されたものは被創造物です。

まことにアッラーは、偉大なる創造主です。

この豊かな自然はすべてアッラーが一人でお造りになったものです。

だれもアッラーと同列にはありません。

なぜなら、被創造物は、アッラーが創造されたものだからです。

特に説明の必要もないかと思いますが、創造主であるアッラーの偉大さが繰り返し述べられています。この箇所の挿絵を見ますと、山があり、田があり、川が流れ、太陽が昇りといった情景です。インドネシア、特にジャワの典型的な田園風景で、インドネシアの自然の豊かさ、美しさが描かれています。それらすべてを創造したのがアッラーだというわけです。

この「アッラーへの信仰」の章では、アッラーの属性が記されています。その一つが今読み上げた部分で、アッラーは、太陽や動物、人間などの被創造物と異なるという属性です。続いて、アッラーは、あらゆるものを見ることができるという属性、あらゆるものを聞くことができるという属性、あらゆるものを知ることができるという属性が次々と教科書に取り上げられています。いずれについても、限られた能力しかない人間と対比させ、アッラーがいかに全智全能であり、偉大であるかが強調されます。

インドネシアのイスラーム教育の教科書から六信、イーマーンに関する内容部分を抜き出す作業をしますと、1年では以上のようにアッラーへの信仰に関する内容が中心ですが、2年で天使、3年で使徒、5年で啓典、来世、天命への信仰に関する学習ができるようになっています。しかし、六信のうちで圧倒的に多く教科書に盛り込まれているのは、アッラーへの信仰に関する内容です。授業配当時間を見ても、イスラーム教育の教科書のなかで六信の教育にあてられた時間は、小学校の6年間で都合65時間に達しますが、そのうち29時間までがアッラーの信仰に関してであることが分かりました。六信の領域は、アッラーへの信仰を中核にした構造であることが理解されます。

第2領域：五行

教科書の1ページはイーマーン、六信に関してでしたが、次の2ページを開いてみることにしましょう。挿絵には、先生が黒板にアラビア語の文を書いている姿が描かれています。内容を読んでみましょう。

信仰の告白は、唱えられなければなりません。

信仰の告白は、信じられなければなりません。

信仰の告白は、行われなければなりません。

信仰の告白は次のとおりです。

(アラビア語で) アシュハドゥ・アンラー・イラーハ・イッラッラー

これは、神の唯一性の信仰と名づけられています。

私達の神は、唯一神アッラーです。

この箇所の見出しには、信仰の告白、シャハダータインと書かれています。これは、イスラームに入信するときに唱える重要な言葉です。アシュハドゥ・アンラー・イラーハ・イッラッラー、つまり、《アッラーのほかには神がないことを告白します》という意味です。次のページを見ますと、アシュハドゥ・アンナ・ムハンマダル・ラスールッラー。これは、《ムハンマドはアッラーの使徒であることを告白します》という意味です。信仰の告白は、イスラームの信仰義務であるイバーダート、日本語で五行と訳されますが、このイバーダートの第一にあげられるものです。それが小学校1年用教科書の最初に取り上げられているということです。五行の領域を全体としてみましょう。

イスラームは、信仰があれば事足りるといった宗教ではなく、正しい信仰を行為によって具体的に表明することが義務とされます。信仰の内的、精神的側面がイーマーンであるのに対し、信仰の外的で実践的な側面がイバーダートであると理解されます。その中で特に重要な実践的義務として、信仰の告白、礼拝、断食、喜捨、巡礼の5つがあり、それを総称して五行というわけです。

五行の第一にあげられている信仰の告白については、今述べたとおりです。第二の礼拝について1年用の教科書では、余り触れられていませんが、2年以上の教科書では、詳細に取り上げられています。特に3年用の教科書では、イスラーム教育の年間授業時数64時間のうち、その約4分の3に相当する46時間までが礼拝の指導に当てられています。一日5回の礼拝の実践指導が中心になりますが、そのほか金曜日や祭礼時の集団礼拝についても詳しい指導法が

示されています。

五行の第三の断食に関しては、4年の教科書にその原則や実施方法が述べられています。イスラーム教徒は、ラマダーン月の1か月間、日の出から日没まで一切の飲食が禁じられます。その目的ですが、教科書には、人間の欲望を抑える意志を養うとともに、社会的には、食生活にも事欠く貧しい人々の苦勞を体験し、慈善や相互扶助の精神を体得することにあると記されています。

五行の第四である喜捨、施しについて集中的に述べられているのは、5年の教科書です。喜捨は、貧しい人の救済を目的とする一種の課税です。ここで思い出したのですが、15年ほど前、私がインドネシアの小学校で初めてイスラーム教育の授業を参観したときのことです。黒板を利用して子供たちが《 $2000 \div 40 =$ 》とか《 $5000 \div 40 =$ 》という計算をしていました。「これは、算数の時間じゃないの」と尋ねたところ、やはりイスラーム教育の時間だとのことでした。しばらくしてようやく分かったのですが、ある収入があった場合、どれだけの喜捨をすれば良いのかを計算していたのです。金銭の場合、それが2.5パーセント、つまり40分の1だったのです。

五行の最後は、メッカへの巡礼です。ところが、巡礼については、特に章を設けたりされていません。五行、イバーダートの領域をみてみますと、礼拝についての配当授業時間数は圧倒的に多いのですが、信仰の告白や断食、喜捨については、それぞれ1章が設けられているだけです。巡礼に至っては、特に章を設定して指導することがないという構造になっているのです。

第3領域：道徳

以上、イスラーム教育の内容を第一にイーマーン、第二にイバーダート、つまり六信と五行という二つの領域にわけて見ましたが、第三に道徳という領域を設定して考えることができます。イスラーム教育の目的は、真の知識の獲得を通して来世への準備を子供たちに授けることにありますが、そのためには、現世において善行を積むことが前提条件となります。道徳をアラビア語でアフラクと言いますが、その部分を教科書から引用することにします。「両親に

対する礼儀」という章です。

お母さんは、私たちを生んでくださった人です。

お父さんは、私たちを大きくしてくださった人です。

両親は、深い愛情をこめて私たちを育てて下さいました。

私たちは、お父さんとお母さんを敬わなければなりません。

両親は、もっともかけがえのない人です。

両親は、私たちから報酬を求めようとしません。

私たちは、アッラーに感謝しなければなりません。

なぜなら、従順なお父さんとお母さんから私たちを生んでくださったからです。

私たちを育てるアッラーの教えにたいして従順であり、

アッラーのすべての命令に対して従順である両親から。

この章には、「天国は、母の足下にある」という副題がついています。含蓄のある表現ですが、両親を敬うこと、両親に対する孝を説いている内容です。ここで注意していただきたいことは、親孝行ということがうたわれているのですが、その背景にアッラーがあり、アッラーに対する信仰と両親に対する敬愛が結びついて考えられていることです。

1年用の教科書では、道徳の領域として、このほか「仕事をするときの礼儀作法」「食事をするときの礼儀作法」という章があります。仕事や食事を始めるまえには、ビスミッラーヒル・ラフマーニル・ラーヒム、《慈悲深き慈愛あまねきアッラーの御名において》と唱えようと書かれています。仕事や食事を終えた後には、アルハンドゥリッラー、つまり《アッラーに讃えあれ》と唱えることが礼儀であると記されています。賞賛に価するのは、ただひとりアッラーだけであるという考えを無意識のうちに身につけさせることが意図されているのです。

小学校の低学年では、家庭や学校、身近な社会において守らなければならない

い礼儀作法に関する内容が大きな比重をもっています。それが中学年、高学年になっていきますと、例えば売買のようなイスラーム法的な内容へと比重が移行していきます。道徳的内容からイスラーム法（シャリーア）的な内容への転換、それが道徳の領域における特色ではないかと思えます。

第4領域：コーラン

インドネシアのイスラーム教育の教科書の内容を分析しますと、六信、五行、それに道徳という三つの領域に分けることができることを述べてきました。小学校1年用の教科書では、これにもう一つコーラン（正確には、クルアーン）の領域が加わります。イスラームの教育はコーランに始まりコーランに終わるという考え方がありますから、これまで述べた六信、五行、道徳という領域もすべてコーランと関係します。ここでは、直接コーランの章句を引用している章のみを取り上げてみることにします。そうしますと、小学校1年の教科書には、都合3か所にわたって「コーランの暗唱」という章があります。どうい章が取り上げられているかといえますと、まず第1章。これはコーランの真髄を余すことなく含んだという重要な章で、敬虔なイスラーム教徒は、1日5回必ず唱えるものです。コーランは全体で114の章から構成されていますが、この第1章を除けば、最後のほうに記されている短い章が教科書に取り上げられています。いずれも、日常の義務的な礼拝その他で唱えられる頻度が高いきわめて重要なものばかりで、それを暗唱することが学習のねらいとされているのです。

コーラン学習の初期段階における目標原理は、コーランの章句の内容を理解することにあるのではなくて、いかに暗唱し、いかに正しく唱えるかにおかれています。しかし、学年が上がるにつれて、目標は、「コーランの暗唱」から「コーランを読む」さらには「コーランを書き写す」へと変わっていく、そういう構造をしています。

おわりに

以上、インドネシアのイスラーム教育について述べてきましたが、教科書を題材として取りあげましたため、どうしても話が規範的な範囲、つまり、どうあるべきかというレベルに限られたきらいがあります。いずれにせよ、教科書を中心にみた場合、イスラーム教育は、アッラーへの信仰および礼拝の実践を中核とする構造であることが結論として導かれました。この点に関し、お隣のマレーシアの教科書内容と比較してみましても、規範的レベルにおけるイスラーム教育は、インドネシアのそれと本質的に同じ構造をなしていることが分かりました。インドネシア、マレーシア、中東の諸国、そこには今日、政治的な国境が厳然としてありますが、イスラーム教育について考えてみますと、いわゆるイスラーム共同体（ウマット・イスラーム）の中には、国境を越えた広がりがあるといえるでしょう。

私の話は、公立小学校においてイスラーム教育がどのように教えられているか、教科書を題材として、規範的なレベルで申しました。それでは、インドネシアの子どもたちは、実際のレベルでどのようなイスラーム教育を受けているのか。その点につきましては、ポンドック・ブサントレンでの豊かな調査実績をもっておられる西野さんから次にご紹介があるのではないかと思います。